故父上に獻ず

森下辰夫

謹みて父上の御靈に申す。

去る一月御大患御本復の後、今旬日にして歸阪仕候て御見舞申上候事、胸おどるを覺え申候

内地研究出張發令を前に、歸阪の御報告仕候はまことに去る六月廿五日の事に候ひき、然るに發令前三日突如父上御重症の電文に接し、奇蹟的に入手せし航空機座席に投じ、新京を出發仕候は七月一日、陽熱く、空碧り。餘りの事にむしろ洞ろなる心は。眼、視れども見えず。耳、聽けども聞こえず故もなく「心は矢よりも早く」の語を胸奥に繰返しつつ、南滿の空をかけ過ぎ、着阪五時卅分を幾度か時計に求めし事に御座候。不幸天候不良の爲め平壤不時着致し、正午より夜九時半迄見知らぬ半島の町に汽車待ちし苦痛御察し奉願候。

七月三日朝枕頭に驅付ければ、にはかに御衰弱の御顏。高熱に意識は明瞭ならぬ内にも「何で歸つて來た」の御言葉に何氣なき風にて「只御小恙の山なれば」と答へ、思はずはふり落つる涙の顏を外向くれば、「早う上衣を脫げ」と、常に替らぬ御言葉に候ひき。夢の如く過ぎし四日、七日午後七時卅五分、阪大病院の一室に瞑目被遊候折、堪え難き悲痛の内に不思議にも强く感じ申候事は死の意義に御座候ひき。

安政六年四月、維新の先哲吉田松陰先生、門下品川彌二郎に與へられし「死」に關するの一文は、數年來之を人にも說き、自らにも云ひ聞かせ居り候者に有之候を、父上樣御最後に到り、正に釋然と解決し得候事、御生前數々の御恩は云ふも更なり、此の期に迄御敎訓被下候事と、深く拜し謝し奉り候。

さはれ、一日濱寺の松林を逍遙仕候ては、御病床の父上に「早く御全快の上白濱に御伴致します」と申せば、「泳がうな」と云はれし御言葉の、松風の内に聞く思ひ仕り、不覺にも落涙し、又一日河内に在る親戚に形見分けとて御衣類を持參致し候折には、去年、同じ道を、七月六日同じ親戚の子の一回忌に當り、又父上と共に步みし事共思出され、思はず形見の品を堅く抱締め申候事に御座候。

御生前の父上を憶へば、常に念頭に浮ぶは寫眞と義大夫淨瑠璃に御座候。淨瑠璃に就いては晩年殊に御精進あり。頑兒が恩師にして斯道に御造詣深き太宰施門先生と御親交を結び被遊れ候事承り、不思議にも忝き御緣と奉存候。先生には御逝後一日洛北の御宅に推參、御多忙中を四五時間の永きに亘り御話頂き候事に御座候。不肖頑兒はその兩者の孰れをも解せず、暗室に殘る寫眞機の、二旬の塵にまみれある樣を見ても、倉の中に高く積重ねられたる淨瑠璃本に御手になる朱字

の跡に接しても、唯強く握締めて拜する外に爲すを知らざる者に有之候。去乍ら、この
皇國に芽生え育くまれし藝術の第一等とも申すべき義大夫淨瑠璃の、兎角影薄れ行く樣は常々殘念に存居候處、況して父上樣との關係の甚ならぬを思へば、解し得ずとは申せ、斯道の發展を衷心より冀幾する一人に御座候。

大日本は神國に御座候。父上の御靈は西方淨土にも、彼方天國にも在らず、先賢諸靈と共に凡眼に見えずと雖も嚴として此土にとどまり、御自身は益々御精進、御切磋あり、我等遺族には深き慈愛と强き激勵の鞭とを以て御注視の事と確信仕候。

肉身六十年の波瀾多き御生涯を閉ぢ、今は善き惡きの境明かに、直なる者のみ榮ゆる世に入られし父上の御靈の前に再拜して誓ひ奉る。

頑兒の身は總べて
皇國の御爲に獻じ奉る可く候。肉身の生命は長きを以て尊しとせず、短きを以て卑しとせず、聽ては御傍に參じ、尊き、神國護持の魂として永遠の切磋に碎身可仕候。

さらば、御形見の時計を腕に、御形見の服を纏ひ、御形見の靴を穿ちて渡滿仕らん。生前の御鞭撻の彌々嚴に、一途に皇國臣民の道を歩ましめ給へ。再拜。

（皇紀二千六百年八月四日）

森下氏と私

本誌同人　太宰施門

森下氏の有つて居られた色いろのもの、殆んど外に掛けがへの無い知識や趣味や教養やを少しづつ我々の方にも廻して一いただいて、ボツ〳〵仕事をまとめて行きたい願ひ、それが完全に、また急に裏切られてしまひました。餘りに意外にも氏は臥床二週目で、それも些とも私の知らない間に逝くなられました。

私どもの毎日會ひ、話ししてゐる人達とは全然タイプの違つた森下氏は、極めて熱のある、活動力に溢れ切つてゐる人のやうに思はれました。義大夫が語れ、またそれを深く味はふ人としての氏と、この二つは別の違つた存在のやうでしたそれが「淨瑠璃雜誌」で一しよになり、極めて意義の大きい仕事に氏は手を著けられました。去年の秋以後の事でした。

昭和二、三年頃お目にかかり、以後途絶えてゐた維がりが急に密接になつて來ました。しげしげお目にもかかり、色々互ひの事を賴んだり賴まれたり。私の方は大して骨の折れない、むしろ愉快な仕事が多かつたのですが、氏の方では相當面倒な、厄介な事柄を引受けられて、隨分困られたやうにも